

集団帰属か、個の尊厳か
ルカによる福音書 17 : 11 - 19
(故中村善多兄記念礼拝説教)

17:11 イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。17:12 ある村に入ると、らい病を患っている十人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま、17:13 声を張り上げて、「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」と言った。17:14 イエスはらい病を患っている人たちを見て、「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」と言われた。彼らは、そこへ行く途中で清くされた。17:15 その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。17:16 そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった。17:17 そこで、イエスは言われた。「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。17:18 この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。」17:19 それから、イエスはその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」

今日の物語は、10人のらい病人の癒しですが、同時に一人の救いの話しでもあります。10人のらい病人のうち、ただ一人、サマリア人だけが戻ってきて、イエス様から救いの言葉をいただきます。聖書では癒しと救いは同じではありません。以前お話したように(そして教会報にも載せた説教ですが)、長血を患った女性が癒されたとき、癒しだけではなく、「あなたの信仰があなたを救った」という言葉をいただき救われました。それはこのサマリア人のときと同じです。救いとは何でしょうか。

ほかの9人はユダヤ人でした。ユダヤ人とサマリア人とは犬猿の仲、敵対関係にありました。ユダヤ人からすれば、サマリア人は純粋なユダヤ人ではなく、むしろ神の教えをゆがめている汚れた人々でした。イエス様は、エルサレムへ向かった出発しようとしたとき、サマリアで歓迎されなかったために、遠回りをしなければならなかったのです(9:51以下)。通行が困難なほどの敵対関係だったことが分かります。

ユダヤ人は、ユダヤ人であるだけで救われる資格があると考えられていました。少し前の癒しの物語で、腰の曲がった婦人を癒したことがありますが(13:10以下)、その時人々は、何も安息日ではなく他の日に癒してもらうべきだと言って責めたのですが、イエスは「この女はアブラハムの娘」ではないか、一日でも早く癒してやって何が悪いといわれました。またこの後で、有名な徴税人ザアカイの話がありますが(19:1以下)、このときも「この人もアブラハムの子なのだから」と救いの根拠を示されます。このように、ユダヤ人であるということは、人々を説得するに足るだけのものがあつた、ユダヤ人は救いに値するという理解があつたのです。

ですから今日の箇所、このサマリア人が戻って来たことは、大変な驚きでした。ほかの9人のユダヤ人は癒しを求めたけれども、救いは求めなかった。10人共にらい病だったときは、同病相憐れむで、仲間だったけれども、癒されたときに、ユダヤ人はこのサマリア人に優越感を抱き、対立関係が復活したのです。サマリア人は、病気は癒されたけれども、自分が人として満足なものであるということ、一人前であるということを否定されていることを思い知らされたのだろうということがゆうに想像できます。彼が癒しの後で必要としたのは、自己存在の肯定でした。

現代風に解釈するならば、ユダヤ人はユダヤ社会の一員であるという帰属意識で満足していた。それに対してサマリア人というマイノリティは、日ごろから差別されていたので、自分が人として生きる価値があるかどうかということが常に疑問視せざるを得ないような立場にあつたのです。この癒しの出来事によって、彼が感じたのは、単なる癒し以上のこと、自分には生きる価値があるということ

でした。それはあの長血患いの女と同じです。「あなたの信仰(ギリシャ語の「ピステイス」で、自己確信と解釈できます)があなたを救った。」それは、あなたが自分について微かに感じている肯定感、自分は救いに値するという感覚、それはその通りのものだ、とイエスが認めてくださったということです。集団帰属が救いではなく、個としての尊厳の回復が救いだったのです。

「集団帰属か、個の尊厳か」。この問題は、人はどこで安心感を得るかという問題です。善多さんは、社会の中でキリスト者として生きられました。ですから風当たりも強かったのではないのでしょうか。会社の監査役という役職の中で、周囲に配慮しながら個を大切にしておられた様子を、著書「監査御免」でうかがい知ることができます。副題は「一監査役による倫理エッセイ」。ここには、会社や社会に対して「物申す」があります。37ページ、世に言う「説明責任」を述べた後、「・・・ン」と書きます。ここには、「お前さん、偉そうに言いすぎてないかい。神の前に不完全な人間なのだからもう少し謙虚であるべきではないのかい。」という、ちょっと斜めから見る視点がこめられているような気がします。神の補いなしでは責任を持って立つことのできない個、逆に言えば、それがあからこそ尊厳をもって責任的であることができる個。そんな善多さんの思いを感じます。善多さんは、代表取締役会長様から前文をいただき、最後に会社名を印字しました。会社や同僚に対する深い愛の中で、「御免」と言いつつ物申すこの書物には、あからさまにではないにしてもキリスト者として信仰の証をする姿があった事を、私たちも憶えたいと思います。